□

風吹けど落つる葉もなし冬枯の雜木林の夕べ淋しも

雪白き中にみどりの大根の葉まばらにみゆる冬のやせ畑

かたへには雪まだ殘る門の畑に雀むれ來て餌をあさる朝

冬枯の庭に一本南天の紅なるがなつかしきかな

白椿落ちたるあとは音もなしたそがれ時の庭は淋しも

夜はふけぬ大天地の靜けさを照せる月の影のつめたさ

霜ふかき枯野の原に只一人立てる心地の今日の我が胸

云ふこともきく事もうし只一人夕くれ方の庭を歩みぬ

あるものをとらへんとして捕へ得ざる今日の心のやるせなきかも

ひそやかに心の中にしのび來て吾をなやます物一つあり

L.

S.

何物か吾おそひくる心地して身動きもせで默してありぬ

ふとしてはもだせる事にたへられで用なき事も云ひ出づるかな

日は落ちぬ西の雲間にほの白う見ゆる光の色のよろしさ

やはらかき春の光にうちひたる少女椿と吾の心と

あか〳〵と空のはてより流れくる夕日に向ふ吾は嬉しも

やはらかき春の光にうち向ふ今朝の心ののどかなるかな

思ふまゝ聲はりあげてうたはまし包みもあえぬ此の嬉しさを

月草

□

ほのかなる春の匂のうらかなし黑き土より麥の青みぬ

むさしのゝ春の木立のむらさきよ黃昏時の泣かまほしさよ

紫のびらうどのごとふくらみし土より野より春は來るらし

麥の芽の若きみどりのかげろひか野を見る君のまなざしのよし

ものいはずなげしひとみのうるほひにオリーブ色のかなしみの見ゆ
はかなくもけおされかちのわが名見ゆ憎しみかけんすべもあらなく
美しき人のこゝろにわがなげし憎しみに似て紫はよし
水色は大空のいろはてもなしかぎりもしらずめでたまへかし
美しきかたきといふもまだ足らす足らねどされど憎しみなげん
かなしとて泣けば魔の見ゆほゝえみてたゞさりげなくたそがれをまつ
じつとして泣けば何なる泣かざれば日の長きゆゑせんすべもなし

□

人もゆかぬ森の古池藻にあをみあやめの少し咲きてありけり
あはれこの心もとなさいかにせん夕べの池をめくりめくれど
池の面にゆらぐ光をつくゞと眺めてあればさひしかりけり
池にきてみればかなしく死の前にをのゝく如くうつる樹のかげ

L.

T.

はひよりてふとみしかゞみ怖ろしみまづなき出でし君なりしかな
うつれるはこのわれなりとたれ人に教へられしぞかゝみ持つ子よ
いたつきに惱めるかほを今日もまたさびしくうつすこのかゞみかな
死(し)にといふかげはちかよる弱き子の胸おどろかしかげはちかよる
さとのぼる日のかげ見れば生きてあることもうれしきひとつなりけり
つきまとふ黒きかげいとひしばしだに離れてあれと願へる心
物かげの菌にも似て世の中の暗きに生くる我か身なにせむ
行く末も小ぐらきかげにまとはれむ・この身としれどなほ生きんとす
春の國かすみの中の朝の鐘さやかになりて夜は明けにけり
山かげの野澤の水のうすけふり霞となりて夜はあけにけり
春の宵ほのかにかすむ月光の中を靜かに花のこぼるゝ
朝かすみやゝにうすれてさ青なる木々はしづかに光り初めけり
はてもなきむさしのゝ原かすみたちひばりなくなり日はながくして